

国語

I

出典

村田麻里子「メディアとしてのミュージアム」へ3 ミュージアムのメディア論『岩波講座 社会学 12 文化・メディア』（岩波書店）

解答

- 問1 1―③ 2―① 3―⑥ 4―⑤ 5―④
問2 ⑤

- 問3 A―① B―② C―⑤ D―④
問4 ア―① イ―④ ウ―② エ―③
問5 ④
問6 ②
問7 ①
問8 ④
問9 ②
問10 ④

問2 傍線の後の「展覧会の構成や方針にはこれらの主催者や展示会社も関わるため、テレビや新聞同様に決してニューtralとはいえない」から考える。⑤がこれに当たる。①・②「テレビ番組や新聞記事」は「人の裁量」や「人の力量」でコントロール可能である。③「独自性に乏しい」とは述べていない。④「ひとつとして同じものがない」が不適。

問5 「ミュージアム」がどのようなメディアであるかは、この後で説明されている。「建物であり、空間であり、……それらの組み合わせによる総体」「複数のモード、チャンネルの……総合的に同時に作用して……きわめて多層的」とある。これらに該当するのは、④の「重層的」である。

問6 「このような拡張的な作用」の「このような」という指示語に着目する。直前の段落に「もはや物理的な空間に押しとどめられることはなくなった」「外や日常と絶えずつながりつづける回路を手に入れた」とある。②の「オンラインや日常と接続」「物理的な空間という制約を乗り越えた」がこれに該当する。①は「展示」に限定している点が不適。

問7 空欄の直前に「ミュージアムの中でのメディア経験やコミュニケーションの在り方を、私たちの日常と切り離して考えるのでなく」とある。ということは、ここではまわってしまった「陥穽」は、ミュージアムでの「体験」を、「私たちの日常」と切り離して捉えてしまったことによる「陥穽」である。「私たちの日常」と切り離してしまい、全体として捉えていないということである。

問8 空欄直前の「換言すれば」に着目する。「カルチュラル・スタディーズの核心」を、(1)から(5)までのように述べ、それを言い換えたものが、『場』や空間を想定し、そこでのⅢを捉えることを目指している」ということになる。選択肢の中で関連するものは、(1)の「問題を文化的実践という観点から理解し、それを権力との関係において考えること」に触れた、④の「文化実践における権力作用」である。

問9 「架橋する」は、橋を架ける。意で、ここでは、橋渡しする、つなぐ、という意味になる。傍線部を含む段落で、

「カルチュラル・スタディーズ」を「……実践する研究領域」と述べている。ということは、「メディア研究」が理論的な研究領域ということになる。第六段落の「『ミュージアムとはなにか』という問いを……根源的な問い」、第七段落の「もうひとつ重要なのは、権力への視座である。……カルチュラル・スタディーズ（文化研究）」という領域から考えて、②の内容が合致している。

問10 ①「古来」が不適。ミュージアムの権力性は二十世紀後半から分析されている（後ろから三段落目）。

②「中立的な展示を目指すべき」とは述べていない。

③第三段落に「送り手と受け手を比較的単純化できるマスメディアとは」「異なっている」とあるので不適。

④第五段落の内容に合致している。

⑤後ろから二段落目に「フーコーの理論に負うところがきわめて大きい」とあるので「忘れ去られ」は不適。

II

出典

谷川嘉浩「観光が土地との関わり方を教える——聖地巡礼、住民、イメージ」（『世界思想』二〇二二年春号 世界思想社）

解答

問1 1—③ 2—⑥ 3—② 4—④ 5—①

問2 A—⑦ B—⑥ C—⑤ D—② E—①

問3 ア—② イ—① ウ—④ エ—⑤

問4 ④

問5 ②

問6 ③

問7 ①

- 問 8 ⑤
問 9 ⑤
問 10 ①

解説

問 4 第五段落に「京都が色々な事態の責任を観光者という部外者に押しつけてきた……色々なことが何かや誰かのせい
にされてきた」とある。新型コロナウイルスの流行で「街から観光者が消えた」ことによって、それまで「不満や不安」を「特定の文化集団」、この場合は「観光者という部外者」に押しつけ、「不満の頃頃はけ口になっていた」と
ことが明らかになったということ。④が正解。⑤は、「住民（当事者）と観光者（部外者）の関係」に言及していない
ので不適。

問 5 「都会において失われたように感じられる」に続くのにふさわしいのは「日常」であり、「失われたように感じられ
る」ことから、その「日常」は「一種の非日常」であるといえる。

問 6 前段落に「観光者のようなアウトサイダーこそが、その土地を差異として経験することができる」とある。これに
合致するのは③である。

問 7 「観光と幻想は切り離せない」の説明になっているのは①の「観光産業は……幻想に寄り添っている」と④の「観
光と幻想は切っても切れない関係」だが、④は「観光」が「部外者に幻想を抱かせる」のではなく、部外者が幻想を
抱いて観光しに来るのであるから不適。したがって正解は①。②は「幻想」を「操作」しているわけではない。③は
「事前イメージ」とは「幻想」のことなのに、「間にズレが生じる」というのはおかしい。傍線部前の「事前イメージ
からのズレ」は、「事前イメージ」＝「幻想」と、実際の観光地とのズレのことである。⑤は事前に抱いていた「幻想」
を見るために観光をするのであるから「要求に応じて」が不適。

問 8 次段落に「京都の住民が抹茶スイーツを頼むとき、その人は観光者と手を取り合っているようなもの」とある。

「京都の住民」は、「観光者」と同じように「幻想」を味わっているのである。

問9

最終段落の内容から考えるとよい。「自分の善良さを疑うことは、共生のスタート地点」「事実や知識を積み上げる『理解』である。……人と人の複雑な相互作用を地道に観察して知識を得ること。こうした理解の先に、前より少し優しい社会がある」とある。この内容に合致しているのは⑤である。

問10

①第一・二段落と合致する。

②パンデミックが気づかせたのは「色々なことを観光者のせいにしてきた」ことである（第四・五段落）。

③第十三段落に「東京の大丸でも食べられる……そこには何の不思議もない」とある。

④第十四段落に「幻想に住民が迷惑しているか」というと、必ずしもそうではない」とある。

⑤「対立した相手の愚かさを……確認する」は、「自分の抱いているイメージを進んで変えようとしないう傾向」であって、「根本的帰属の誤り」||「気質的な側面を重視しながらも、状況や事情を軽視する傾向」とは違う（終わりから三〜四段落目）。